

## 山村社会における

### 商品生産の展開と農民層の動向

#### —高知県十和村古城部落の事例—

高知大学 大野 晃

本報告でとりあげる高知県幡多郡十和村は、現在、椎茸生産全国一を誇る村であり、その実核をなすのが古城部落である。この古城部落では、昭和三十三年に古城椎茸研究会が結成され、以来、この研究会は部落の農民のほとんどをここに結集・組織化し、椎茸栽培技術の研究、古城式椎茸乾燥場の発明等先駆的業績を残し全国的に

注目をあびている。この部落ぐるみの研究会を援助してきたナツ農協は、昭和四十三年に朝日農業賞を受賞し、近年（昭和五十四年）では、この研究会が山村振興優良事例の対象となつて現在にいたつてゐる。そして、この古城椎茸生産については、すでに多くの報告がなされている。が、これらの報告は必ずしも実態を明確に反映したものではない。そこには現在多くの問題が横たえられている。椎茸原木確保の問題、生産資材の値上がり、加えて椎茸価格の低迷、後繼者問題等が椎茸生産農家を下降分解へ追い込みつつあり、一部出稼ぎ農家の出現をもみるにいたつていて。また、チエンソーによる椎茸原木の伐採、電気ドリルによる玉木への穴開け作業等によって、世帯主や主婦に白ろう病がではじめている。近代化路線にのらず、独自の乾燥椎茸による商品生産を展開してきた古城部落は、今や大きな危機に直面しているといえる。

古城部落は戦前より共有林をもつていたが、戦後、分割され各戸に等しく配分された。が、組山はなお残されており、伝統的な形式平等性は崩されつつも、今なお生きている。そして、その部落運営は、自由民権運動によつて明治十四年につくられた自治組織たる「民会」の規約、部落総民会会議規則を基本線として行なわれている。また、現在では、毎年五月一日のメーテーの日を勤労農民の祭日と定め、どんなに農作業が忙がしくても、この日は部落総出で盛んな「椎茸祭り」を行なつてゐる。

前述の如き問題に直面しているのである。この問題—課題の克服は

近代化路線に抗しての新しい“むら”的創造より道はなく、それは何よりも現実そのものが要請しているといえる。

今年は、自民権百年にあたる。自由民権運動の合言葉「自由は土佐の山河より出づ」が現代的視点から再考されるときである。

高度に発達した戦後日本資本主義の現状にあって、“むら”とは何かを山村社会における商品生産の展開と農民層の動向をあとづけつつ一考してみたい。